

# 女性における男性性の発露としての化粧

～女子学生に対する質問紙調査から～

小 沢 哲 史

## 1. 背景・問題

### 1-1. 化粧とは何か

「化粧をしている」というとき、一般的には、ファンデーションや口紅を代表とする化粧品を顔に付けているということを指していると考えるのが妥当だろう。もっとも、使用される化粧品は、ファンデーションや口紅に限らない。例えば、通称“フルメイク”や“ヘビーメイク”という場合、そこには、ファンデーションと口紅に加え、眉の手入れ、眉墨（アイブ로우）、アイライナー、マスカラ、アイシャドウ、コンシーラー、頬紅（チーク）、リップグロスの使用が認められる。また、マニキュア・ペディキュア、付け爪など爪への装飾、つけほくろ（あるいはラメ）、香水（あるいは臭い消し）の使用も化粧の一部と考えて良いだろう。相対的に頻度の低い化粧としては、アイプチ、カラーコンタクトの使用や点眼薬によって瞳を美しく見せることも知られている。歯を白くすること、歴史的には逆に黒くすること（お歯黒）をつけ加えることもできよう。

また、髪を美しく保ち、髪型を整えることも化粧行為の一つであり、洗髪時のリンスの使用に始まり、整髪剤や髪粉、ヘアピン、カチューシャ、髪留め、簪の使用、かつら（ウィッグ）、ヘアー・エクステンションの使用、脱色、染毛、パーマネント・ウェーブが知られている。男性の場合、ひげを剃る事あるいは生やすことも近い行為であろう。

さらには、“基礎化粧”と呼ばれるように、スキンケアも化粧と密接な関係が認められる。スキンケアでは、洗顔、保湿、美白、日焼け、紫外線対策、シワ対策、シミ対策、むだ毛処理が行われる。

加えて、広く身体加工と呼ばれる種々の行為も化粧と密接な関係を認めることができる（石田，2000）。そこには、美容整形、ダイエット、筋力トレーニング、ピアス、刺青（タトゥー）、瘢痕、割礼、歯列矯正、抜歯、削歯、カレン族の女性が首に真鍮製のコイルを巻く

事、中国の纏足、コルセットを挙げることができる。

すなわち、化粧品顔への使用という狭義の化粧行為に対し、広義の化粧行為とは、直接、間接、一時的、永続的を問わず、外見を整えるために、身体に何らかの痕跡を残す（残そうとする）すべての行為を指すと考えられる。だとすれば、入浴や、散髪、爪切りなども広義の化粧行為なのかも知れない。さらには、例えば、かゆくても、肌に跡が残るのを恐れてかかないとすれば、かかないという行為は、化粧行為なのかも知れない。また、整容行為（鏡を見て、服装や髪のを直す）や男らしいとされるしぐさ、女らしいとされるしぐさも外見に関わる行為であり、広義の化粧行為と考えられなくもない。

ここでは、化粧の定義についてこれ以上の議論は行わず、化粧行為が実の所かなりの広がりを持っていることを指摘するに留める。

## 1-2. 化粧をするのはなぜか

ここでは、化粧をするのはなぜなのか、という問いを、ニコ・ティンバーゲンの4つの要因から考えてみる。すなわち1. 化粧は、生物界においてどのようなあり方をしているのか（系統進化要因）、2. 化粧は、人類にとってどのような利益があるのか（究極要因）、3. 化粧は、人の生涯発達においてどのように獲得され、変化するのか（発達要因）、4. 個人において化粧は、いかに生起するのか（至近要因）の4つである。

### 1-2-1. 系統進化要因

化粧は一見ヒトに特有な文化的行為のようにも思われるが、そこに系統発生上の進化の跡をたどることができる。生物の中には、単なる機能性・合理性からすれば不都合とも言える外見を進化させていることが少なくない。その理由として特に知られているのは、性選択、すなわち異性を惹きつけることで、自らの遺伝子を残そうという働きである。例えば、キンカチョウのオスのくちばしは、成鳥となると赤くなり、これがメスを惹きつける手がかりになっている。注目すべきは、メスの持っている知覚的な好みは、オスが生物として実装している内容（赤いくちばし）とはずれている、ということである。例えば、オスのくちばしを生物学的にあり得ないほど赤く塗ると、よりメスに好かれる(Burley & Coopersmith, 1987)。それだけでなく、人間が個体識別のため足輪をつけると、生物学的には足が赤いことはあり得ないにもかかわらず、青や緑ではなく赤の足輪がメスに好かれるらしい(Burley, 1988)。一方、赤ならどの部位でメスに好かれるというわけではなく、白黒の縞状になっている尾羽を赤くするとメスに嫌われる。おそらくこのような現象はキンカチョウに特異なこととは言

えず、そこに化粧行為そのものがあるわけではないが、その先行要因となる知覚的好みは実在し、生物学的に実装されていない外見がもたらす利益という意味で、化粧の系統進化的要因を成していると言えるだろう。

他にも生物の行動の中には、化粧の起源とも言うべきものがいくつか見られるが、性選択における知覚的好みの実在が最も重要と考えられる。

### 1-2-2. 至近要因

#### 〈社会的地位の指示〉

かつて、化粧は、成人であることや、既婚者であること、一人前の戦士であること、一族の長老であることなどを示してきた。現在でも性別や趣味、価値観、所属集団を示すために化粧が行われている。また経済的な位置づけを示すこともある。化粧は長く、身分が高く、経済的に恵まれた者に限られたものであった。現代でも用いる化粧品が高級か否かといったことによって、経済的な位置づけを示すこともあろう。

#### 〈対人関係や社会活動への積極性の向上〉

また、化粧をすることによって、外見の向上が得られることが多く、その結果、異性および同性からの評価の向上が得られ、このことは化粧を行う主たる理由のひとつと考えることができる。このような評価の向上が客観的に存在せずとも、化粧には、気分の引き締め効果や自信の増大、高揚感など対人関係や社会活動への積極性の向上が知られている（上方・田頭，2002；飛田，1996）。これらは化粧の主たる効果のひとつであろう。このことに絡んで人から見られる自分を意識しやすい人（公的自己意識の強い人）や顕示欲求の強い人が、より好んで化粧を行うという報告もある（Cash & Cash，1982；笹山・永松，1999）。

#### 〈衛生、健康のため〉

化粧は、紫外線や乾燥からの皮膚の保護、あるいはマッサージ効果をめざして行われることがある。また化粧療法と言って、化粧を施し、勧め、ほめることで、やけどで顔に跡が残った人たちやらい病患者の積極性を高めたり、認知症の進行を妨げる試みが知られている（e.g., 重松・宮原・片岡・昆・堀・伊崎・横田，1982）。

#### 〈自己愛撫、気晴らし（ストレス解消）、創造の楽しみ、変身による自己解放〉

化粧には、次のような様々な自己充足的な意味での心理的效果があろう。(a)化粧は自らの顔に直接触れることから、自己愛撫の喜びを与える、(b)生活の中で生じる様々な緊張やストレスを緩和する働きがある（阿部，1993）、(c)さらに化粧に習熟するにしたがって、自分の顔の印象を変化させるために工夫を重ねることの喜び、すなわち、創造の楽しみがある（笹

山・永松, 1999)。加えて、化粧の内容にもよるが、(d)化粧は日常的な自分を忘れさせてくれる、すなわち変身願望からの自己充足といった効果もある(笹山・永松, 1999)。

### 1-2-3. 発達要因

広義に化粧を捉えれば、産湯を使った時点から、外見を整えるという意味で化粧行為は始まっている。人は乳幼児期を通じて、身体を洗い、髪を整え、歯磨きをおぼえていく。すなわち、外見を整えることを社会的に要求され、また学習していくのである。また、親、街行く人々、テレビなどを通じて、早期に化粧の存在を覚え、真似事をする子どもも多い。その後、小学校から高校までの学校教育の現場では、化粧行為は非行行為の手がかりとして、否定的に捉えられることとなる。

若い女性と中高年の女性の化粧意識を比較した猪又・石垣・大塚(2005)によれば、化粧をする理由として、女子大学生では、「顔をきれいに见せるため」が最も多いのに対して、中年期や高齢者の女性は、「礼儀・身だしなみ」が最も多い。また、永尾(1983)でも、年齢が上がるにつれて、「美しく見せたい」が減少し、「エチケットとして」「気分がひきしめるため」が増加していくことが報告されている。そこには広範な個人差もあるようだが、おおよそ「きれいに见せるための化粧、他者のための化粧」から、「欠点を隠すための化粧、自分のための化粧」へと変化していくと言えるかも知れない。

### 1-2-4. 究極要因

人類にとって、化粧を行う究極の要因は、人類が膨大な分業ないし協業を行う社会的生物であることと言える。すなわち、化粧行為は、言語や表情、視線、ジェスチュアなどと同じく、人類のコミュニケーション・ツールのひとつと言える。そこに共通する性質として、(a)虚偽による歪曲がかなりの程度可能でありながら、一方でまた、完全に真実を隠蔽することも困難である、(b)そこに伝えたい真実があるにせよ、必ずしも完全に表現できるわけではない、(c)受け手と発し手双方の解釈のプロセスを含むために、都合の良い自己呈示と、他者に対する都合の良い理解が生じてくる、(d)個別の文化・習慣が時に相互理解を困難にする、を挙げることができる。

### 1-3. 本論文における化粧研究の視点 ～化粧を行う3つの意味～

本論文においては、ある個人の化粧行為を検討する時に、上記4要因のうち至近要因を整理する形で、次のように互いに排他的ではなく、重層的に作用する3つの意味を考慮すべき

であろうと考える。すなわち、(1a) 自己作用、(2a) 他者作用、(3a) 社会的異物排除作用（願望）の3つである。生存を重視する生物のあり方からすれば、(1b) 自分を守り、(2b) 味方を集め、(3b) 敵や異物の侵入を避けるというように書き直すことができよう。あるいは、現代女性の化粧行為を考えれば、(1c) 健康、(2c) 美、(3c) 習慣、あるいは(1d) 自己愛撫、(2d) 人間関係の向上、(3d) 社会的位置の呈示などと表現することも可能かも知れない。習慣と化した化粧や化粧による社会的位置の呈示を、自分と異質の人や物、事柄が近づかないようにという社会的異物排除作用（願望）と考えており、このような立場は、やや独自性が強いが、種々の化粧を説明し、化粧研究の領域を広げる可能性があると考えている。

例えば、化粧の起源を目や口などの穴から毒気が入り込まぬように色を塗ったり、ピアスによってかんぬきをかけたりすることと見る説がある(e.g., 倉持, 1993)。化粧のいわば「魔除け起源説」は、社会的異物排除作用そのものである。そして毒気を信じる社会に生きていた人々にとっては、衛生や健康につながる自己作用があり、さらには、おそらくはより魅力的に見えたなどの他者作用もあったのであろう。

あるいは、近年、マンバ（ヤマンバ）・メイクといって、目や唇の周囲を白く塗り、顔全体を濃い褐色に塗る化粧が一部の女子中高生に見られた。そこには素顔がわからなくなるぐらいの濃い化粧であることによって、変身願望の充足による自己解放という自己作用がある。また、その奇抜さから、注目を浴びることができるという他者作用がある。そしておそらくは自分たちの世界を誇示することで、異質な人・物・事柄を避ける願い、すなわち社会的異物排除作用もあったように思われる。

逆に、ノーメイクないしナチュラルメイクが求められる仕事は、保育、看護、介護など、他者への受容性が強く求められる種のものであり、これは化粧の社会的異物排除作用の抑制という解釈も可能である。また、子ども、生徒、高齢者など、保護される立場に置かれやすい人々の化粧が相対的に否定的な評価があることにも、社会的異物排除作用の抑制という意味があるのかも知れない。

こうした筆者の化粧論はきわめて仮説的なものであり、いまだ萌芽的領域を一步も出ないものであることは言うまでもない。

## 2. 予備調査の紹介 ～現代の女子学生の化粧への関わり方および性格的な性差との関連～

### 2-1. 目的

「1. 背景・問題」で述べた化粧論は、今後、化粧を検討していく上で、有用な理論的示

唆を与えるものではあるが、実証主義的な研究に載せていくには、まだ距離があるといわざるを得ない。ここでは、あくまで研究の端緒として化粧を行う層として無視し得ない女子学生がいかなる化粧意識を持っているのか、そして現代に強く流布している「化粧＝女性的な行為」というイメージが、どの程度実態を反映したものであるのか検討したい。筆者の化粧論によれば、化粧は個人の意識だけでなく無意識にもまたがっているものであるが、だからこそ、化粧の意識的部分がいかなる形で実証的に測定できるのかどうかを確認しておくことには意味があろう。また、筆者の考える広義の化粧行為からすると、化粧行為は女性に限ったものではないが、現代の狭義の化粧行為は極端に女性に偏っている。そこで、女性に内在する男性性と女性性という観点を導入し、狭義の化粧行為との関連を検討することにより、広く化粧のもつ意味への洞察を深めることができるのではないかと考えられる。そこで、女子学生を対象として化粧意識を検討し、さらに、それが女性性、男性性と関連しているのかどうかを検討した。

化粧意識については、芳賀(2007)で用いられた質問項目を再分析する形で測定した。また、性差については、男性性・女性性を兼ね備えた“アンドロジニー(androgyny)”を最も好ましいとするBem(1974)によって考案されたBem Sex Role Inventoryの日本語版(東, 1990; 1991)によって検討した。BSRI日本語版の質問項目は、伊藤(1978)、関根(2005)によって検討が重ねられている。これらの報告では男性性項目、女性性項目が、実際に男性と女性の間で得点に統計学的に有意な差が生じるかどうかについていくぶん違いがあるが、おおむね信頼できると判断した。

## 2-2. 方 法

研究参加者：千葉県内の私立女子大学学生 156名 未回答が2問あった1名を除き、155名を対象とした。

「化粧へのこだわり」をテーマとした卒業論文である芳賀(2007)において、指導教官であった筆者と作成・収集した質問58項目から、(1)化粧そのものについて問うていないもの、(2)化粧について事実を問うているもの、合計39項目を削除した<sup>1</sup>。

<sup>1</sup>ただし、削除された項目のうち、平均値が高いものについては、調査対象となった女子学生に共通する傾向と言えるため上位4項目を以下に記した。「今よりきれいになりたい(平均4.6)」、「一度でいいからプロのメイクアップアーティストにメイクされたい(平均4.4)」、「結婚式の時は1番きれいな自分で挙式したい(平均4.4)」、「他人に肌がきれいと言われたい(平均4.3)」。

## 2-3. 結 果

### 2-3-1. 女子学生の化粧意識

上記の基準で残った19個の質問項目に対して、統計解析ソフトウェアSPSS ver. 15.0を用い、因子分析（主因子法、プロマックス回転）を行った（表1）。その結果、4つの因子が得られた。一部に因子負荷量が小さい項目や、2つの因子に負荷の見られる項目、信頼性

表1 女子学生の化粧意識（プロマックス回転後のパターン行列）

	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	共通性
第1因子：周囲との調和を踏まえた化粧の肯定的利用（日本女性化粧意識） $\alpha = .834$					
52 身だしなみとしてお化粧する	<b>.767</b>	.066	-.091	.224	.539
39 化粧に対して興味がある	<b>.695</b>	-.070	-.015	-.175	.495
56 新しいメイクをしても、周囲の評判が悪いとやめてしまう	<b>.692</b>	-.071	.011	.411	.458
49 化粧をするのは嫌いだ（逆）	<b>-.604</b>	.101	-.002	.480	.652
3 化粧をすると気分転換になる	<b>.578</b>	.219	-.051	-.142	.583
55 化粧をすると気持ちが引きしまる	<b>.546</b>	.081	.231	.047	.586
33 会う人や出かける所でメイクの仕方をかえる	<b>.472</b>	.016	.144	-.132	.395
57 同性に良い印象を与えるようにメイクしている	<b>.410</b>	.139	.000	.270	.273
第2因子：化粧依存 $\alpha = .838$					
29 化粧している自分の方が自分らしくいられる	.123	<b>.774</b>	-.110	-.092	.677
25 スピーンの時に知人に会おうと恥ずかしくなる	-.134	<b>.760</b>	-.080	-.092	.634
26 スピーンでコンビニに行くことには抵抗はある	.079	<b>.675</b>	.107	.054	.422
47 化粧しているときは、人は積極的になれる	.103	<b>.537</b>	.150	.198	.506
24 化粧する前後で自分は変わると思う	.107	<b>.501</b>	.034	-.121	.404
35 化粧により男性に魅力的だと思われたい	.270	<b>.305</b>	.116	-.067	.398
第3因子 化粧と気分の連動性 $\alpha = .867$					
37 メイクや髪型が決まらないときは気分がのらない	.008	-.024	<b>.916</b>	-.082	.692
38 メイクや髪型が自分の思い通りにいった日は気分が良い	.004	-.006	<b>.831</b>	-.019	.839
第4因子：化粧回避 $\alpha = .534$					
48 化粧をするのは面倒くさい	-.277	-.075	.066	<b>.454</b>	.364
58 普段と違うメイクは、皆と話題にされそうで恥ずかしい	.076	.083	-.055	<b>.434</b>	.178
15 人目につくような目だったメイクは避けている	.231	-.228	-.066	<b>.409</b>	.187
説明された分散	34.9%	6.2%	4.1%	3.7%	
累積の説明された分散		41.1%	45.2%	48.9%	

(クロンバックの $\alpha$ )の低い因子が見られた。

第1因子は、「身だしなみとしてお化粧する」「新しいメイクをしても、周囲の評判が悪いとやめてしまう」「会う人や出かける所でメイクの仕方をかえる」「同性に良い印象を与えるようにメイクしている」というような、他者や状況に配慮するような項目と、「化粧に対して興味がある」「化粧をするのは嫌いだ(逆転項目)」「化粧をすると気分転換になる」「化粧をすると気持ちが引きしまる」というような化粧への肯定的評価を示す項目の2種類が混在する形で因子が得られた。

ここから、女子学生の化粧意識は、他者や状況との調和と分ち難く結びついているようにも思われた。またこのことは、より年配の女性との化粧意識の比較研究を行なった猪又・石垣・大塚(2005)の知見からも女子学生に限る理由はなく、さらには平均値や寄与率が高いことから、日本女性の最も基本的な化粧意識でもある可能性もあろうと考えられた。そこで、第1因子を「周囲との調和を踏まえた化粧の肯定的利用(日本女性化粧意識)」と命名した。

第2因子には「化粧している自分の方が自分らしくいられる」「スッピンの時に知人に出会えると恥ずかしくなる」「スッピンでコンビニに行くことには抵抗はある」「化粧しているときは、人は積極的になれる」「化粧する前後で自分は変わらと思う」と、素顔の自分より、化粧した自分を高く評価する項目が並んだ。これらは自己評価が化粧に依存して高められるという意味で「化粧依存」と名付けた。

第3因子は「メイクや髪型が決まらないときは気分がのらない」「メイクや髪型が自分の思い通りにいった日は気分が良い」というほぼ同内容の質問項目からなり、「化粧と気分の連動性」と名付けた。

第4因子は「化粧をするのは面倒くさい」「普段と違うメイクは、皆と話題にされそうで恥ずかしい」「人目につくような目だったメイクは避けている」といった化粧に対して回避的な項目が並んでおり、「化粧回避」と名付けた。ただし、信頼性係数は十分ではなかった。

また、第1因子から第4因子までの互いの因子間相関はかなり高かった(表2)。便宜的な表現をすれば、「第2因子>第1因子 $\approx$ 第3因子>第4因子」という順序で、化粧への関

表2 因子相関行列

	調和的化粧利用	化粧依存	化粧の気分連動	化粧回避
調和的化粧利用		.702	.625	-.252
化粧依存			.594	-.153
化粧の気分連動				-.070
化粧回避				



心やこだわりの強弱を考えることができるかも知れない。

### 2-3-2. BSRIとの相関

BSRIについての平均値、標準偏差、中央値を算出し、参考のため東(1991)の値と比較したところ、値はすべての下位尺度においてやや低く、逆に標準偏差はやや高かった(表3)。

次に、化粧意識の4因子に関して因子得点を算出し、BSRIの男性性得点、女性性得点、人間性得点との間の相関係数を算出した(表4)。その結果、「周囲との調和を踏まえた化粧の肯定的利用」は、男性性、女性性、人間性のすべてと有意な相関が見られた。次に、「化粧依存」は、女性性、人間性と有意な相関が見られた。「化粧と気分の連動性」については、女性性とのみ有意な相関が見られた。「化粧への否定的評価」については、いずれとも有意な相関は見られなかった。現代の日本社会では、化粧は女性がするものというイメージが強く根付いており、そのイメージを強く持っているであろう女子学生への調査から「化粧への回避的態度」以外の3つの因子が、女性性と有意な相関を示すことは、自然な事と言えるかも知れない(Cash, Rissi, & Chapman, 1985)。一方、「周囲との調和を踏まえた化粧の肯定

表3 BSRIの基礎統計量

				本研究 (N = 155)	東 (1991) (N = 345)
男 性 性	平均値 (標準偏差)			76.1 (18.0)	82.3 (17.2)
	中 央 値			77	82
女 性 性	平均値 (標準偏差)			87.1 (17.0)	91.08 (14.9)
	中 央 値			87	92
社会的望ましさ	平均値 (標準偏差)			84.5 (13.4)	88.4 (9.9)
	中 央 値			85	88

表4 化粧意識とBSRIの相関係数表

	化粧肯定	化粧依存	気分連動	化粧否定	男性性	女性性	社会的望ましさ
化粧肯定		.738**	.665**	-.229**	.208**	.382**	.387**
化粧依存			.652**	-.257**	.142	.319**	.294**
気分連動				-.208**	.134	.256**	.155
化粧否定					-.015	.080	.133
男性性						.294**	.554**
女性性							.728**
社会的望ましさ							

\*\*.....p<.01

的利用」のみが男性性と有意な相関を示した。

#### 2-4. 考 察

本研究で得られた結果は、一見意外性のあるものである。現代女性の化粧意識とも言える「周囲との調和を踏まえた化粧の肯定的利用」が、男性性と有意な相関を示し、同じく化粧に対して肯定的である可能性があっても、「化粧依存」や「気分との連動性」は男性性との相関を弱めている。さらにもっとも男性性と相関を示していても不思議のない「化粧への回避的態度」は全く相関していなかった。

それでは、ここで測定された男性性とは何であろうか。やや冗長となるが、質問項目を列挙してみる。「自分の判断や能力を信じている、自分の信念を曲げない、独立心がある、スポーツマンタイプの、自己主張的な、個性が強い、自分の意見を押し通す力がある、分析的な、リーダーとしての能力を備えている、危険を犯すことをいとわない、意思決定がすみやかにできる、人に頼らないで生きて行けると思っている、支配的な、男性的な、はっきりした態度がとれる、積極的な、リーダーとして行動する、個人主義的な、負けず嫌い、野心的な」である。いずれも、Bem(1974)の目論見通り、平均値として女性より男性が高く評定される属性であっても、個々の女性にあるのは当然である。また、社会の中で活動していく場合に有用と考えられる形容詞も多い(東(1991)における第2因子「積極性とリーダーシップ」)。したがって、男性性尺度は、社会性の一部を測定していた可能性がある。

ただし、今回特に測定しなかったものの化粧の肯定的利用が女性性の受容を前提としている可能性は考慮しておく必要がある。すなわち他者との調和を踏まえながら、化粧を肯定的に行う女性は、あくまで女性であることを前提としながら、社会的に積極的にふるまおうとする人たちである、ということである。

今回は、女子学生が対象であったが、今後、社会との関わり方の違い、すなわち、職業の有無や種別、あるいは地位によって化粧と男性性の関連がどう変化するのかを検討すれば、この解釈の当否を検討することができよう。

また今後のデータ収集の方向性として男性の化粧行為と男性性・女性性の関連はどうであろうか。例えば、男性らしさを強調するメイクやボディー・ビルディングは、外見上男性らしさを増し、男性であることの誇示につながるが、行為を行う意識そのものは女性的なのかも知れない。また、外見へのこだわりは、男性においても、職業やその種別、地位によって違いがあるというような検討課題も挙げられよう。

### 3. ま と め

本論文では、化粧を概観し、その系統進化的要因、発達要因、至近要因、究極要因を探った。さらに(1)自己作用、(2)他者作用、(3)社会的異物排除作用(願望)というやや独自の見解を紹介した。次に、女子大学生に対する質問紙調査を再分析することで、化粧意識とジェンダーの関係を検討した。その結果、「他者との調和を踏まえた化粧の肯定的利用」が「男性性」と相関をしめした。結果を女性の化粧と社会的積極性の関連を示すものとして解釈した。

東 清和 心理的両性具有Ⅰ —BSRIによる心理的両性具有の測定— 早稲田大学学術研究(教育・社会教育・教育心理・体育学編) 39, 1990, 25-36.

東 清和 心理的両性具有Ⅱ —BSRI日本語版の検討— 早稲田大学 学術研究(教育・社会教育・教育心理・体育学編) 40, 1991, 61-71.

阿部恒之 リラクセーション法としての化粧 現代のエスプリ「リラクセーション：こころとからだのリラックス」 311, 1993, 123-132.

Bem, S. L. The measurement of psychological androgyny. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 42, 1974, 155-162.

Burley, N. Wild zebra finches have bandcolour preferences. *Animal Behaviour*, 36, 1988, 1235-1237.

Burley, N., & Coopersmith, C.B. Bill color preferences of zebra finches. *Ethology*, 76, 1987, 133-151.

Cash, T. F., & Cash, D.W. Women's use of cosmetics: psychosocial correlates and consequences. *International Journal of Cosmetic Science*, 4, 1982, 1-14.

Cash, T. F., Rissi, J., & Chapman, R. Not just another pretty face: sex roles, locus of control, and cosmetic use. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 11, 1985, 246-257.

飛田 操 化粧の個人的効果と対人的効果に関する実証的研究 コスメトロジー研究報告 3, 1996, 145-150.

石田かおり 化粧せずには生きられない人間の歴史, 東京, 講談社現代新書 2000.

猪又美栄子・石垣理子・大塚祐子 首都圏女子の衣服・化粧に対する意識 学苑 777, 2005 145-151.

伊藤裕子 性役割に関する研究 教育心理学研究 26(1), 1978, 1-11.

芳賀奈津美 服飾造形学科と発達科学科を対象とした化粧へのこだわり尺度の作成 和洋女

子大学 2007 (平成18年度) 卒業論文

上方美紀・田頭穂積 女子大学生の化粧行動と自己意識との関連性 広島文教女子大学教育  
相談センター 10, 2002, 121-132。

倉持喜久子 化粧の歴史 化粧心理学 (資生堂ビューティーサイエンス研究所編), 東京,  
フレグランスジャーナル社. 1993, 297-312.

永尾政夫 女性における化粧意識 化粧文化 8, 1983, 133-144.

笹山郁生・永松亜矢 化粧行動を規定する諸要因の関連性の検討 福岡教育大学紀要 48  
(4), 1999, 241-251.

関根 聡 女性大学生における性役割意識 大阪女学院短期大学紀要 35, 2005, 75-84.

重松 剛・宮原幹夫・片岡俊紀・昆 宰一・堀 恵二・伊崎正勝・横田篤三 らい患者の  
ハビリテーションにおける化粧品の心理学的効果 日本化粧品科学会誌 6, 1982, 181-  
187.

(人文学部発達科学科准教授)